

家庭科研究部

- 1 研究主題 「ひと・もの・こと」とのつながりを大切にし、
自らの生活を豊かに創造する子どもの育成
～家庭科における横浜らしい教育課程の創造～

2 研究主題について

横浜らしい教育課程の創造とは、「生活の営みに係る見方・考え方」を働かせながら、様々な場面で活用できる資質・能力を身に付けていく姿を、子どもが「じっくり考え 高め合い 次につなげる確かな学び」に向かう姿として、これまでも家庭科が大切にしてきた問題解決的な学習の中で捉え、育むことである。

「じっくり考え 高め合い 次につなげる 確かな学び」の実現に向けては、題材などの内容や時間のまとまりを見渡して習得・活用・探究のバランスを工夫することが必要である。そのために、学校や地域の実態を適切に把握し、教科横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施に必要な人的・物質的資源を確保するとともにその改善を図っていくことが挙げられる。

家庭科の指導においては、日常生活と結び付けた問題解決的な学習を効果的に取り入れることが大切である。子どもが学ぶ意味を理解し、自分の具体的な課題をもち問題解決に向けて知識・技能を活用して解決方法を考え、実験・実習等の計画を立て、問題解決的な学習過程の工夫や改善をし、課題の発見・解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習の充実を図っていく必要もある。また、学習の過程や結果を振り返り、実践したことの成果と課題を確認することで次の課題を明確にしたり家庭実践につなげたりすることができる。さらに、学習したことを家庭生活に生かし、自分にもできるようになったという達成感を味わったり、家族や周りの人の役に立ったりした経験が、継続的に実践しようとする意欲や態度につながると考える。

3 年間活動報告

(1) 委員会・研究部

協力委員	… 各区研究会と市研究会の連絡 研究会及び研修会で配付された資料を区研究会で配付 調査研究における協力（区の調査集計を担当）
学習研究部	… 基礎研究の推進及び実技や授業を伴った実践提案 市研究大会提案 研究会の企画・運営
調査研究部	… 令和2年度実態調査「家庭科担当者・家庭科学習に関する実態調査」の実施と報告
広報部	… 速報配付

(2) 活動内容

日時	会場	研究会・研修会の主な内容
6月10日（水）	平沼小学校	■総会 ■今年度の家庭科学習の進め方について～情報交換～
7月1日（水）	平沼小学校	学習研究部提案 ■はじめての家庭科 「マスクを作ろう」～今年度の製作（手縫い）の学習について（実技研修）
9月9日（水）	平沼小学校	学習研究部提案 ■「家庭科学習の指導と評価について」 ～ご飯とみそ汁の授業を通して～

10月7日(水)	相武山小学校	学習研究部提案 ■家庭科授業づくりのポイント(令和元年度全市授業研を通して)
11月4日(水)	平沼小学校	■横浜国立大学教授 堀内かおる先生による講演会 演題「新しい家庭科教育の充実をめざして」
12月2日(水)	平沼小学校	学習研究部提案 ■「生活の課題と実践A(4)」の授業づくりについて
1月13日(水)	平沼小学校	第2次教育研究大会 ■新しい家庭科教育における食生活に関する学習の充実について 講師 横浜国立大学教育学部 教授 杉山 久仁子 先生
3月		■調査研究部報告 調査のまとめ

(3) 新しく取り組んだ内容(コロナ禍での学習を進めるために工夫した内容)

- ①実技を伴った研修会「自分たちの健康を守るためのマスクを作ろう」
「健康・安全・快適」の視点をもって手縫いでの製作に取り組み、4つの見本から選択して研修を行った。子どもの発達段階に応じて、5年・6年の両学年で取り組める内容を提案した。
- ②講演会「新しい家庭科教育」「食生活に関する学習の充実」
ウィズ・コロナ時代の家庭科教育、また、食生活の充実における「実習・実践」などについて学ぶ機会を設けた。実習が難しい場合にも、示範や模擬授業などで経験値を高めていく必要性についてお話をいただいた。
- ③生活の課題と実践の授業づくり
今年度から新設された新しい指導内容の題材について、「課題設定と計画」を中心に実践提案を行った。「課題設定」の場面では、自分の家族や家庭を見つめる時間を大切にする事で主体的な学びにつながることを、実際の指導をもとに提案した。

4 研究の成果と課題

【成果】

- 研究主題に基づいた実技を伴った研修、講演会を行い、具体的な事例を通して指導及び支援の在り方、題材構成の工夫等、よりよい家庭科の授業づくりについて研究を進めた。また、会員のニーズに応じた研究・内容を設定したことで、初めて家庭科を指導する先生にもわかりやすい提案を行うことができた。さらに、今年度においては、コロナ禍における授業に工夫について、情報発信や会員同士による情報交換も行った。
- 今年度は、区の部長が必ずしも市研会員とはならなくてもよい「区協力委員」という体制をとって市研を運営した。市研後に、各区への連絡時間を設けて、市研から区研への情報発信を行った。市研で提案した内容や資料を学校や区研にもち帰り、実際に家庭科の授業を指導している先生方に伝えていただくことができた。
- 臨時休業後の教育課程の作成や再編成、また、制約のある中での実習の進め方など、ガイドラインに基づいた情報や資料を市研として随時発信した。
- 今年度から実施された3観点の評価について、指導のポイントや評価の具体的な方法、場面を研究することができ、新しい評価について理解を深めた。また、コロナ禍で調理実習に制約のある中、タブレット端末を使用して調理計画を工夫する研修も行き、プログラミング的思考を育む提案を行った。

【課題】

- 家庭科を指導する方の立場がさまざまであるため、「区協力委員」という体制をとることが難しい区もあり、市研からの発信が区研に伝わりにくいこともあった。市研での研究内容を伝えていくための工夫を今後も考えていく必要がある。市研と区研の連携は来年度も継続していきたい。
- 今年度は、オンラインでの市研を行うことはせず、密を避けた形で会場に集まって市研を行った。来年度は、オンラインで市研を行うこともできるよう、準備していく。
- 多くの先生方からの授業提案や実践提案を共有するためにも、各区からの取組の様子や情報をさらに集めていく。